

演題名：外科修練医の労働環境は改革が必要か？～外科学会全国アンケート調査二次解析～

[演者]高村 卓志:1, 谷河 篤:2

[共同演者]喜安 佳之:3, 須田 千秋:4, サシーム パウデル:5, 小西 孝明:6, 山本 直宗:7, 石田 苑子:8, 藤川 善子:9, 阿部 朋未:10, 齊藤 光江: 11

1. 藤沢湘南台病院外科
2. 東北大学病院高度救命救急センター
3. 京都大学消化管外科
4. 佐久医療センター救命救急センター
5. 北海道大学消化器外科 II
6. 東京大学乳腺内分泌外科
7. 徳山中央病院外科
8. 北播磨総合医療センター外科
9. 深見台中央医院
10. がん研究会有明病院乳腺センター乳腺外科
11. 順天堂大学乳腺腫瘍学講座

【背景】 2024 年 4 月から医師の働き方改革が施行されるが、医師が健康に働き続ける環境を整備することは、質・安全が確保された医療体制を維持していく上で重要である。しかしながら、外科修練医の労働環境の実態は把握されていない。修練医の労働環境を把握・整備することによって、最適な外科研修プログラムを模索することを目的とする。

【方法】 令和 3-4 年度の外科専門医試験合格者全員を対象にオンラインアンケート調査を実施した。外科修練医の労働環境を月の残業時間が 80 時間未満群 (Short: S 群) と 80 時間以上群 (Long: L 群) に分けて外科修練医の労働環境を比較検討した。各群間の比較は、質的変数は χ^2 検定、連続変数は t 検定を用い、 $p < 0.05$ を有意とした。

【結果】 回答者は 694 人(回答率 49%)中、L 群 462 人 (67%)、S 群 232 人 (33%) であった。医局所属の有無(L 群 81%vs. S 群 78%)について差は認めなかった。修練内容について、全身麻酔手術執刀数が 200 例以下(29% vs. 27%)、論文執筆数が 0 篇の割合(21% vs. 25%)、平均年収[標準偏差] (950[430]万 vs. 910[430]万)における差は認めなかった。回答者による、修

練中に出会った主な指導医の臨床能力と指導能力の評価は、臨床能力(98% vs. 96%)は差を認めなかったが、指導能力 (81% vs. 89%、 $p<0.01$)は L 群で有意に低かった。L 群は、労働環境について厳密な労働時間管理が行われていた割合が低かった(10% vs. 22%、 $p<0.01$)。さらに、ハラスメントを受けたと感じた人の割合(48% vs. 28%、 $p<0.01$)やドロップアウトを真剣に検討した割合(14% vs. 3%、 $p<0.01$)、研修に不満を持った割合(18% vs. 10%、 $p<0.01$)が L 群で有意に高かった。

【結語】 労働時間が長かったにも関わらず両群間で手術執刀数・論文執筆には差がなく、給与は増えていなかった。さらに、L 群ではハラスメントを受けたと感じた人やドロップアウトの検討及び指導医の指導能力や研修に不満を持つ人の割合が高かった。働き方改革により労働時間の短縮や適切な労務管理を行うことで、研修への満足度を高くすることが期待される。